
ヨウジョ・ジャパン

knight

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヨウジヨ・ジャパン

【Nコード】

N9795Y

【作者名】

knight

【あらすじ】

勇太は幼馴染の彼女を助け、高い橋の上から落下して行った。

その落ちた先は……

第一節 美の探究（前書き）

どうか怒らないで、生暖かい目で見守ってください。
行ける所までは、毎日更新予定です。
宜しくお願い致します。

第一節 美の探究

彼は、その時熱く語っていた。

「ここに公言しよう。私は美少女が大好きだ！
こら、そこ！ 変態言うな！

良く見てみたまえ、あの完成された美しさを！
つばらな瞳、カモシカのような足。そして、キメ細やかなる美しき
素肌！

どれをとつても完璧ではないか！ あれこそ究極の美だ！」
両手を広げて熱弁している私に、呆れたような視線を向けているの
が若干一名。

「それ、ただ幼いだけじゃない。大体、女性の前でロリを熱く語る
こと自体がおかしいのよ。
この変態！」

「何を言う！ 私は決して変態ではないぞ。万人よりストライクゾ
ーンが広いだけだ！」
そう断言する私に、冷たい視線を送りながら言った。

「へえ……じゃ、オバサンでも良い訳？」
その言葉に、私は大きく溜め息をついた。
「君は何も判っていないな。最近の御姉様方をしつかりと見たまえ、
10歳は軽くサバ読める美しき淑女が何と多い事か！

これこそ日本の美学が発展している証だ！ 十分にストライクでは
ないか」

「あんだ、どんだけゾーンが広いのよ……」
完全に呆れ顔で目をそむけている。
「大は小を兼ねると良く言うではないか。

そもそも美を鑑賞していた私に蹴りを入れてきたのはお前ではない
か！」

それは、何処の台風かと思うほどに強く身体ごと横に押し流された。
気が付けば、目の前に誰も居ない……
ん？

いったい何処に行った？

橋の影にスカートの裾が見えた。

ような気がした……

だが、考えているヒマは無い。

間髪居れずに私は走った。

危なかった……

あわやと言う所で、その腕を掴む事が出来た。

これは……高い……

下を見れば、自動車やトラックがオマケのミニカーより小さく見える。
る。

あまりの恐怖で、彼女は悲鳴さえ出せない状態のようだ。

こりゃ、落ちたら只じゃ済まないぞ……

慌てて周囲を見回しても、助けてくれそうな人影は無い。

参ったな……

ただ何で、ここだけ手すりが無いんだよ……

そう、手すりがあれば落ちるはずなど無い。

だが、何故か私達の居る位置だけ綺麗に掴まる物が無かった。

これって、犯罪行為だろ……

うつ……ちよつと待て……これは……マズイぞ……

私も橋から身を乗り出して片手で支えている状態だ。

そしてその柱は意外に太く、指に力を込める事が出来ない。

徐々に滑っていく……

やばい……このままでは二人とも落ちる……

腕力だけで粘っているが、そろそろ限界だ。

仕方が無い……最後の手段だ……

私は残りの力を振り絞り、振り子のように彼女を振った。

いーち、にーい、さん！

渾身の力で彼女を引き付けると、勢いよく橋の上に跳ね上がった。

「お前だけでも生きろ！」

力尽きた私が落下する瞬間、全てがスローモーションのように遅くなった。

ああ、本当にヤバい時はこうなるって聞いた事があるな。

そうか、これで終わりなのか……あっけないものだな……

ん？ 私を見ているのか？

今まで、あんな表情で見られた事なんてあったかな？

おや？ もしかして今すぐカツコイイ？

せめて最後の瞬間だけでも、彼女にカツコ良い所を見せられただけでも良かった。

先立つ不幸は許されないだろうが、これはこれで良い人生だった。

うん、もはや私に悔いは無い。

笑顔で見送る私に、彼女は叫んだ。

「出来る訳ないじゃないバカー！」

落ち行く私に向かって、彼女も一緒に飛び込んできた。

「うわ！ 意味ね……」

第二節 ニジ、どジ?

「もし……大丈夫ですか?」
ん?

助かったのか?

うお、頭痛て……

思わず頭を手で抑えながら、静かに目を開けてみた。

おお……美少女だ……目の前に美少女がいる。それも人気子役並みにカワイイじゃないか。

こんな美の究極に、一般ピープルが巡り会えるはずも無い。だったら、これは夢なのか? やはり死んでしまったのか?

確かに、あの高さから落ちたのだ。死んでいて当然である。

そうすると、ここはあの世?

ならば、誰も咎める者は居なかつた。

もう、形振り構っている場合ではない。

これは千載一遇のチャンスである。

せめて、お友達にならなければ!

偉大なる光源氏よ! 親愛なるナボコフよ! 今こそ我に力を与えたまえ!

おもわず、前に身を乗り出して美少女の両手を握り締める。

「そこな美しいお嬢さん、ぜひ私と仲良くなつて下さ……」
後頭部に衝撃が走つた。

「いいかげんにしなさいよ、この変態!」

どこかで聞いた声だ、妙に懐かしい……

「つてお前、何で居るんだよ!」

「こつちが聞きたいわよ! 気が付いたらここなのよ! 説明しなさいよ!」

そう言われても、私に解る訳も無い。

しばし首を左右に振り、ゆっくりと周囲を確認する。

「何も、わからん！」
また後頭部に衝撃が走った。

美少女が声を上げた。

「あ、頭にお怪我をされております。私の家に治療できる物があります。どうぞ付いていらしてください」

確かに、私の後頭部から血が出ていた。

まあ、今の所は他に何の当ても無い。私達は大人しく付いて行った。

その道中、三人で話しながら歩いていった。

美少女の名前は、マエカラ・キョウコ前唐教子と言うそうだ。

おいおい！ 日本人かよ……

だが、その後の言葉に驚いた。

「私は、教師をしております」

「はい？ 教師？」

この美少女は、何を言っているのだろうか？

何か血迷った？

もしかして、おままごと？ それとも妄想癖？

何だか良く判らないが、この場で変に否定しても仕方ない。

私達も、教子に自己紹介をした。

私の名前は、イmano・ユウタ今野勇太

そして私の後を追いかけて飛び込んだこの女性は、オイカケ・ヨウコ幼馴染の笈掛遥子

二人とも同じ学校に通う、ごく普通の高校生だ。

かなりの腐れ縁と言って、語弊は無いだらう。

まあ何となく付き合っているような雰囲気になってデートしたりしているが、

実はお互いにこれといった相手が居ないだけの話である。

まあ、そんな事情は話しても仕方が無いので、

当たり障り無い程度で紹介を終わらせたのは言うまでも無い。

何やら、街らしき雰囲気の所が見えてきた。
教子に案内されて辿り付いた先は、驚く事に美少女が溢れかえった
街だ。

なんだよ……ここ……

辺りを見渡しても、大人が異常に少ない。

それどころか、男子も見当たらない。

私にとっては嬉しい話ではあるが、ここまで美少女だらけだと不気
味でもある。

さらに、ここまで大量に居ては

美少女のありがたみさえも激減してしまうのは不思議な現象だ。

ここは、一体どうなってるんだ？

その時、遥子が冷たい視線で言ってきた。

「それで、何で私達はこんな所に居るわけ？」

その視線があまりに痛いのが、現状では何も答えようが無い。

「わからん……全く、わからん……」

それに諦めたような溜め息をつく。

「それじゃ、どうにもならないじゃない」

少しでも冷静になれるように、心を落ち着かせる。

「うむ、解っている。この状況は確かに尋常では無い。だが、今や
れる事は少ないのも確か。ここは出来るだけ多くの情報を収集する
べきだろう」

「それは、そうね……」

私達は、教子に案内されるままに家の中へ入っていった。

ここは、美少女ばかりの国。

その名も、ヨウジヨ国。

そのまんま過ぎて、もはや何も言う事が無い……

この人々は、我々のような大人の姿に成長しない種族だ。私が数人見かけた大人の姿をした人間は、どうも違う種族だそう。そして教子は、本当に教師だったようだ。知らなかったとは言え、失礼な事を考えてしまった……ちなみに他の国との交流は基本的に少ないそうだが、ここはその中でも最果てに位置する。この町を訪れる他の種族は限りなく少ないと教えてくれた。

怪我の治療を済ませた後に、お茶を用意してくれたのでそれを頂きながら私達の事情を話した。始めは話の内容を理解できなかったようでキョトンとしていたが、こここの事情が全くわからない旨を伝えると色々と教えてくれた。

すぐに問題になりそうと言えば、生活に直接関わる身近な事柄だろう。

どんな話が出てくるのだろうか？ と興味津々に聞いていたのだが、話を聞いていくと不思議なくらいに違和感が無い。

何故か知らないが、私達の常識がかなり通用するようだ。文字がほとんど一緒ならば、貨幣価値もほぼ同じある。

そして何故か、エンの単位だった。

他の国は、ドルとかユーロになっっているらしい。

気持ちが悪いくらいの一致である。

まさかと思つて現金を見せてもらつと、さすがに同じではなかったが妙に懐かしい。

それは、まるでオモチャである。

どう見ても、子供銀行の紙幣と硬貨なのだ。

全く、ありがたみが無い……

おもわず二人で笑ってしまった。

教子が不思議そうな顔をしているので財布から現金を出して見せると、

「かつこいい！」と感動されてしまった。

まあ、ここでは使えないのだが……

しかし、そうになると教子が日本人のような名前も領ける。

ここは、感覚的に日本と考えても間違いでは無いだろうと言つ結論にも至つた。

こうなると、今の所は目立って苦勞を伴いそんな事柄は無さそうだが。私達は、ひとまず胸を撫で下ろした。

第三節 なに、それ？

今、全世界が懸念している問題があるらしい。

どうやら海を渡った先の大陸には、

ジヨシコーサーと言う恐ろしい生き物が居るといふ。

「女子高生？」私達は目を見合わせた。

私は教子に聞いてみる。

「その女子高生って、どんな生き物だい？もしかしてこんな？」

遥子に向けた指は、思い切り平手で弾き落とされた。

おもむろに、教子が暗い表情で話し始める。

「実は、私達も見た事が無いのです。

勇敢な者達が何人も大陸に向かいましたが、帰って来た者は誰一人

としておりません」

「だが、放つて置けば問題は無いんだろ？」

私の言葉に首を振る。

「いえ、そう断定できません。と言うのもジヨシコーサーの勢力の

中で

最も恐ろしい存在が生まれ出たと言われています。

私達に伝わる予言が正しければ、いずれ世界は闇に包まれるでしょ

う」

途中の一言に引つかかった。

「予言？」

私が問うと、教子は声を低くして語り始めた。

「はい、それは……1999年の夏、サスペンスの帝王が降ってくる……」

る……」

船越が降って来てどうするよ……

「そして……逃げよ逃げよオチツイテ逃げよ……と有名な言葉を残

しています……」

避難訓練かよ……

「それって、当てになるのか？」

私の問いに、驚いて反論する。

「何をおっしゃいますか！ これは偉大なる予言でございます！」
何だかなあ？ 言う顔をしている私達に、さらに話を続けた。

「古の時代、ノセタラダマスと言う偉大な予言者がおりました」
また、いきなりイカサマ臭いな……

「彼は国王暗殺や大惨事を記した予言書を残しました。
これまでの歴史を見る限り、全て予言通りなのです。
そして最後の章に世界の終末を記した

ハリセンボンと言う予言を残しております」

おいおい……

「他にもホームシックレコードで未来を垣間見たと言う予言者も
おります、

コモリウタと呼ばれる予言書を残しております。

それによればナマハーゲと言う恐ろしい闇の者が、
ワルイゴイネガなる強大な魔法で世界を滅ぼしたと記されていま
した」

それは、ただの怖い夢だろ……

「我々に伝わる全ての偉大なる予言書が、その復活を示しているの
です」

いや……聞けば聞くほどに信憑性が……

「それだけでは、ありません！」

話半分と言った私に、何だか教子がムキになっている。
まるで子供のようだ……

いや……見るからに子供なのだが……

「他の国にも予言や伝承があり、とても共通しています」

ほう……それは気になるな。

「隣の国では、ハリセンボンと同様のハルマキドンと言う予言も存
在しているのです」

そう来たか……

「近年、新たにペロンチーノと言う者が世界の終末を予言しました」

まさか、食べ物シリーズじゃないだろうな……

「ウドガー・オイシーという者も未来を見ております」

旬の味ですか……

教子はさらに続きを語るうとしているので、さすがに私は切り出した。

「いや良く判った、予言は良く判った。もういいよ」

それに、目をキラキラと輝かせて

「やっと、判っていただけでしたか？」と聞いてくるので仕方なく

私は頷いた。

はい……聞いた私が、悪うございました……

第四節 どうする？

神妙な顔つきで、教子が私達に聞いてきた。

「あの、お二人はこれからどうするおつもりなのですか？」

それは、全く決まっていない。

いや、この状況で何も決めようが無い……

「どうしたもんだらうね……考えてはいるんだけど……」

私が困った顔で言うと、続けて教子が言った。

「もし、お二人さえ宜しければ冒険者になつてみてはいかがですか？」

「冒険者？」

「はい。勇敢な者達の行方も判らない上に、それを調査する事も進んでいません。そこで国は冒険者を雇っているのです。」

なるほど、探偵みたいなものか……

「もし、お二人がその道を選ぶのであれば、私にも協力できる事はあります」

協力ね……

確かに、何の後ろ盾も無かろう現状でその提案はありがたい。

しかし、どうしたものか……

私は教子に聞いてみた。

「ちよつと遙子と二人で、これからの事を相談していいかな？」

「はい、では私はお茶を入れ替えてきますね。ごゆっくりどうぞ」

教子は、ティーポットを持って部屋を出て行った。

さて、どうしたもんだらうか？

「なあ？ どう思う？」

遙子は、私の問いの答えた。

「いや、久々に笑ったわ。涙出て来たし」

「いや、そういう問題じゃなくてさ……」

思わず眉を顰めた私を見た遙子は、軽い溜め息をついてから言った。

「あれが本当の話かって事？」

「そうそう」

私が頷くと、遥子はどこか遠くを見つめた。

「あたしには、本当に思えないわね」

一呼吸置いてから、私はそれに答えた。

「だよな」……」

おもわず、溜め息が漏れる。

だが1つだけ気になるのは、誰も帰ってきた者が居ないって所だ。

これだけは事実として考えて良いだろう。

「まさか、行く気？」

遥子は、ただでさえ大きい目をさらに大きくして私を見ている。

「ああ、他にする事も思いつかないしなあ……」

私が頼杖をついて嘆くように言うと、遥子も同じように言った。

「確かにそうね、生活基盤が無いのよね、あたし達」

「そうなんだよ……そこが大問題だ……」

小さく頷きながら答えた。

第五節 仕方が無いか……

湯気が立つポットを持って、戻ってきた教子に尋ねてみた。

「それで私達は、まず何をすれば良いんだ？」

「やる気になりましたか？」

何故か教子は、目を輝かせている。

そんなに嬉しいのだろうか？

「まあ、他にやる事が思いつかないしな。君が協力してくれるなら、私達としてはとてもありがたい」

目をキラキラさせて頷いている。

しかし何だ？ この変な違和感は……

「それで、どうやってその大陸に行くんだ？」

私が問うと、教子は話し始めた。

「それには、まずオバ山岳地帯を越えなければいけません」

今度はオバサンかよ……

「オバ帝国は、この大陸では一番に強大な戦力を持っております。

そして入国の際は、あらかじめカア殿下の許可をいただくことになります」

嫌だな、それ……

「そしてオバ帝国から、オバ傘下の共和国を横断いたします。」
横断したくないな……

「その先に、オジ三国があります」

オジサンも居るのね……

「オジ三国とは、穏やかな民のマス才族、頑固な事が有名なキギヨウ戦士族、

そして一番社交的なチヨイワル族が集まり1つの国になりました。

その先端にチヨイワル族が所有するパンツェッタ港があります。

そこからなら船が出せると聞いております」

何か知らんが、行く気が無くなって来た……

ちなみに、この世界では我々のような男や女と言う概念は無いらしい。

このヨウジヨ国では基本的に全員が女性で生まれて、状況次第で男性になる場合がある。

そして他には、生まれた時に性別がない種族もいくつかある。

それ等は、出逢った相手次第で男になったり女になったりするそう
だ。

自然の性転換かよ……どっかの魚みたいだな……

だが少なくとも、オジ三国のカップルだけは見たくない気がする……

さて、大陸に渡ったとして……

せめて、目指すべき者くらいは押さえておきたい。

今予言されている恐ろしい者は、フジヤ・マンバと呼ばれているそ
うだ。

確かに、怖そうな名前だ……

多分、それが魔王なのだろう。

だが、恐ろしいのはそれだけではない。

フジヤ・マンバにはフジヤ・マツチヨと言われる側近がいて、

その直属部隊である親衛隊が強敵らしい。

きつと、筋肉の塊りなのだろうな……

近年、勇者が魔物と戦った古い文献が、オジ三国で発見されたそ
うだ。

教子はその内容が知りたくて、教師の伝手を使って写本を手に入れ
た。

肝心の内容だが、あまりに長いので聞いているうちに疲れてきた。

まあ、話としては意外に簡単だ。

つまり、平和な世界にダンカイ・ノセダイと言う魔王が率いる軍団
が攻めて来たらしい。

それに勝利したのが、シンジン・ルイ信神ルイと言う名の勇者だった。

極論ではあるのだが途中の長話は、財布を失くしたただの、ナンパをしたただのと……

私の言い方も悪いかもしれないが、どう聞いてもさほど重要には思えなかった。

だが何故か、割と最近の話に思えてならないのは気のせいだろうか？

それでも、途中で少しはマトモな話もあった。

勇者一行は、コジユウ塔の試練で強力な武器と魔法を手に入れたらしい。

そして、その装備と技が勝利の決め手となったそうだが。となると、まずはそこを目指すのが妥当な選択だろう。

だが、コジユウ塔の試練と言言葉が激しく気になる……

私達は、すごく嫌な気分に浸りながらも、まずはコジユウ塔を目指す事にした。

教子が、何か書いている。

「何を書いているの？」

私が訪ねると、ジャンっ！ とばかりに書いた紙を見せた。

「これは冒険者になる為の、推薦状及び許可章です。これをお城に持って行って、

魔王討伐と行方不明者の搜索を誓約する書類にサインすれば500万円の援助金が手に入ります。

さらに行方不明者を発見できれば一人当たり300万の報酬が頂けます。

そして私は、これを発行する資格を持っているのです」

私達は、目を丸くして見合わせた。

なんだそれ……いきなり500万って……

何か知らんが、凄い資格じゃないか……

「そんなに貰っちゃって良いの？」

「ええ、何しろ誰も生きて帰ってきた事が無いのです。このくらい当然ですよ」

何か笑顔で、怖い事を言わなかったか？ 今……

第六節 出発してみる？

ああ………出発前から憂鬱だ。

まず、名前が良くない。

何だよ、コジユウ塔って………

教子が、町の外まで一緒に来てくれた。

そして町の外にある道まで出ると、教子が何気に遠くを指差した。

「あれが、コジユウ塔です」

って近っ！

すぐそこじゃないですか、お嬢さん………

と言っても、冷静に見れば一山を超えるくらいはありそうだ。

しかし、山より高い塔とは凄いな。

私は、思わず聞いてみた。

「あれは、誰が作ったの？」

「サクラガ・キレイダを作った、パクチーと言う偉大な建築家と聞いております」

はい………聞いた私が、悪うございました………

私達は、教子に何かを手渡された。

何だ？ これ………

「それは、私達の国では旅の出発の時にお渡しする風習があります。お守りのような物です。」

どうか身に付けていてください
いっ寺？

そこに書いてある寺の名前を見て、二人で噴出してしまった。

「あの………何か、おかしかったですか？」

教子が、不安そうに見ている。

「いや、ごめん。ありがとうね、大事にするよ」

私が言うつと、安心したように笑顔に戻った。

「じゃ、行つてくるわ」

私達が軽く手を振ると、これでもかと言うくらいに手を振り返してくる。

それは、どこの子供だよ……

手の振り合いが三度目に突入した時、遥子が呟いた。

「終わらないわよ、これ……」

「だな……」

これでは、出発できるのかさえも怪しい……

この際、教子の事は放置しておこう……

私達は新たな道を切り開く為に、コジユウ塔へと向かった。

歩きながら遥子に、あの時どうして私の中から飛び込んで来たのか尋ねてみた。

遥子の話によれば、落ちて行く私は何やら眩しい光に包まれていたらしい。

それで、おもわず飛び込んだそうさ。そして死ぬとも思ってた居なかつたらしい。

安易だ……あまりに安易だ……

生死を決定する瞬間に、普通は飛び込まないだろう……

その神経だけは理解できない……

「もう、二度と無茶はするなよ……」

私が言うつと

「あんたもね……」

冷たく、あしらわれてしまった。

どのくらい、歩いただろう？

遥子が、バテ始めている。

「少し、休憩するか？」

私が問いかけると、何も言わずに何度も頷いている。こりゃ、キテルな……

私は休めそうな場所を探すと、そこに遥子を座らせた。

「大丈夫か？」

私の問いかけに、ただ手を上げる。

ダメだこりゃ……今にも死にそうである……

とりあえず、教子が持たせてくれた水筒のお茶を飲ませた。何気にコジユウ塔を見ると、まだ半分くらいはありそうだが。しかし、もうすぐ下りになるはずだ。

そうすれば、遥子も何とか付いて来られるだろう。

とりあえず、これは一日がかりになりそうだな……

辺りも暗くなる頃に、ようやく到着した。

目の前まで来ると、その大きさに圧倒されてしまう。

「デカイな……」

私が声を上げると、遥子が不安そうに答えた。

「本当に大きいわね……まさか、これを登るの？」

「そう言う事に……なるだろうな……」

私が言うと、遥子はガツクリと肩を落としていた。

さて、とにかく入らなければどうにもならない。

こんな森の中で野営するよりは、遥かにマシなはずだ。

「まずは、扉を確認しよう……」

私が声をかけながら視線を向けると、その顔はすでにゲッソリしている。

「そうね……」

もはや能面のようなのだが……

大丈夫だろうか？

扉の前まで来ると、一度立ち止まる。

遥子は、私を抜いていった。

「おい！ ちょっと待て！」

私の声に答える事も無く、ユツクリと振り返る。

「確認もしないで近寄ったら危ないぞ。すでに試練は始まっているかもしれないし……」

それに、糸の切れたマリオネットのように頭を下げた。

これでは、今日中に登り始めるのは無理そうだな……

「ちょっと待っていてくれ、確認してくる」

何とか立ってはいいるが、頭を下げたまま返事が無い……

この中に、休める場所があると良いのだが……

第七節 塔の攻略ね〜……

入り口を慎重に見て回るが、トラップのような物は見当たらない。だが、油断は出来ない。

私は隅々まで見て回った。

これ以上は、判らないな……入ってみるか……

その扉は、異常に大きい。高さは、3メートル近くあるのではないだろうか？

開くのか？ これ……

試しに扉を押してみると、全く反応しない。

では、引いてみようと思うのだが持つところが無い。

う〜ん、いきなり難解だぞ……

私が腕を組んで悩んでいると、扉が手前に少し動いた。

「え？ 何で？」

意味不明だ……

だが、これで扉を引けば開けられる事は確かである。しかし……

私は棒を拾ってきて、扉の隙間へと静かに入れてみた。

その時、突然に巨大な扉が轟音を立てて閉まった。

「やはり、そう来たか……」

挟んだ木が、見事に粉碎している……

危うく、指を持っていかれる所だった……

「ちよつと！ 大丈夫？」

その声に振り返ると、遙子が目を丸くして見ている。

「ああ、大丈夫だ。何か嫌な予感がしたんだ……手を入れて無くて良かったよ」

私が答えると、安心した表情になった。

さて、問題だ……
どうやって開けるべきか……
私が悩んでいると、また馬鹿にしたように扉が少し開く。
こいつは……完全に舐められているな……

私は塔の周囲を腕組みしながら歩き回っている。
別に、暇な訳ではない。

何か使える物は無いだろうか？

私は、周囲を探して回っていた。
ん？

これは、何故置いてあるのだ？

無造作に、ブロックが積んである。

ほう……なるほどね……

私は、とりあえずブロックを3個ほど扉の前まで運んできた。

さてと……

完全に人を舐めきった感じで開いている、扉の隙間にブロックを置いてみる。

やはり、さっきと同じように扉は轟音を立てて閉まった。

だが先ほどと違うのは、ブロック1つ分の隙間を残している事。

私は、そのまま待った。

しばらくすると、扉が動いた。

やはりな……

最初よりもブロック1つ分多く隙間が開いている。

「よし！ こいつは攻略できた！」

私は、さらに3つのブロックを持ってきた。

扉の隙間に1つづつ入れて行くと、やがて扉は人が入れる広さまで開いた。

静かに、扉の中を覗き込む。

「なんだ、これ？」

目に入ってきた内部は、ロウソクが灯っていて妙に明るい。

「誰かいるのか？」

その問いかけに反応は無い。

見渡しても、人影は一切見当たらない……

今度は、そう来たか……

激しく怪しい雰囲気だが、ひとまず入るしか道は無かろう……

「おい、塔の中に入るぞ」

私が声をかけると、遥子がとぼとぼ歩いてきた。

塔の扉を入ると、全体を見渡してみる。

落ちてきそうな物は……別段無さそうだな……

続いて床を確認して周る。

落とし穴も……無しと……

うくん……次は、何で仕掛けてくる気だろうか？

中を歩き回ってみるが、仕掛けらしき反応は無い。

ここが、良いかな……

とりあえず、ここなら外の風にも吹かれないので良いだろう。

遥子をそこに呼ぶと、荷物を置いて座らせた。

「靴も脱いで、出来るだけ楽にしておかないと後で辛いぞ」

遥子はそれに頷いて、言うとおりにした。

ひとまず、このまま遥子が回復するまで休憩だ。

場合によっては、夜明かしも覚悟しなくては……

深夜の気温によっては、ブロックを挟んだ入り口の隙間がかなり痛い。

だが、あれを閉めてしまうという事は、自ら脱出ルートを塞いでし

まうような物。

最低限、それだけは避けたかった。

どのくらい経っただろうか？

いつしか遥子は、私の膝の上で寝息を立てている。本当に疲れていたようだ……

まあ、慣れない山登りをして来たのだ。致し方が無い。

到着したのが夕方なので、感覚では4時間ほど経過しただろうか？ いずれにしても、ここでは夜中は寒くて寝ていられないだろう。

そして幸い、この灯りは切れる事が無さそうだ。

攻略は、何時からでも開始できる。

今のうちに、なるべく寝かせて置いてあげよう。

突然の身震いで、目が覚めた……

警戒するように、辺りを見渡してみる。

これは、参った……

どうやら私も、ウトウトしてしまったようだ。

先ほどと比べ、気温が相当に下がってきている。

かなり、夜も更けて来たのだろうか？

「ん？ あたし寝ちゃった？」

遥子も、目が覚めたようだ。

「ああ、5時間くらいは眠れたのかな？」

「え？ そんなに？ ごめん……」

「いや、気にしないでいいって。私も、少し寝ていたよ。

それに、上には何時からでもいけるしね」

遥子は、笑顔を浮かべて頷いた。

さて、これからは地味な戦略になりそうだ。

階段を眺めながら呟いた。

「この先も、気をつけた方が良くかもしれない……」
それに、遥子も頷く。

「さて……ぼちぼち、出発してみるか……」

私達は身支度を整えると、最初の階段をゆっくり上がり行って行った。

第八節 塔の攻略ね〜……その2

遥子が、また私の元を離れていく。

「あれは、何？」

私には見えない何かを指して、ひたすらに歩いて行ってしまっ。

「ダメだ！ 行くな！」

私の言葉も虚しく、遥子はあつと言う闇に包まれ消えていった……
くそ……

私は、おもわず舌打ちをする。

一体どういっつもりだ？

先ほどから、こんな事の連続だった。

まるで、幻覚を見せられているとしか思えない。

今まで何とかして遥子を引き止めていたが、

私から勝手に離れて行く度合いがみるみる多くなっていった。

かく言う私も、何度もありえない物を見せられて全く先に進めないで居た。

そして遥子が居なくなった瞬間から、幻覚は完全に消えて元の塔に戻っている……

そんなに、私達を引き離したいのか？

実際この塔の仕掛けは相当に卑劣で、

油断すれば腕の一本も持つていかれそうな勢いではあるが、

さすがに殺意までは感じられない。

かなり根性の曲がった奴が仕掛けた事は確實だが、クリアする為の道筋は確かにある。

RPGを少しでもプレイした事があるなら、何とか解決できるレベルだ。

決して、無理ゲーでは無い。

と言う事は、人によって試練の度合いと内容が違う可能性も否定できないな……

こうなれば、それぞれに試練に立ち向かわなければいけない。

少なくとも、遙子はゲームに関して素人では無いはずだ。

私の買ったRPGゲームが、すでに何十本も行方不明になっている。

「いつ返すつもりだ？」と聞いてみたら、

「そのうち、まとめて持つてくるわ」とアツサリ答えやがった。

まあ、私はすでにクリアした物だから大した問題では無いのだが……

ひとまず、あれだけのゲームをクリアしているのなら

この塔の仕掛けなど、屁でもないだろう。

それでも、下手をすれば怪我で済まないのは確か。

私としては、心配でならない……

なんとか頑張ってくれよ、遙子……

私は、ひたすらに謎を解き上へと登って行った。

そう、急がなければならぬ事情がある。

ゲームの定番とまでは行かないが、ここまで来て確信めいた物を感じていた。

この嫌らしいトラップを仕掛ける奴であるなら、

きつと最後の階は二人が一緒でなければクリアが出来ないはず。

少なくとも、奴は完全にゲーム感覚で仕掛けを作っている。

そこまで一人で攻略しなければならぬのなら、最後は尚の事巧みに仕掛けるはず。

さらに他の可能性を考えれば、強敵と戦う羽目になるかもしれない。

それは、いわゆる塔のラスボスだ。

その場合は、一人で勝つ事は不可能である場合がほとんどだ。

ゲーム等では、それと気付かせない為に中ボスを用意している。

またかと思って戦ってみたら、あっという間に全滅する事など良く

ある話だ。

そんなトラップを事前に察知するには、よほどゲーム慣れしていなければ無理だろう。

遙子の性格は、基本的に突撃型だ。

それに、あっさり引つかかる可能性は高い。

もしそんなトラップがこの先にあるのなら、

せめて私が先に行って待つて居たいのが心情でもある。

今の私達に、失敗は許されない。

いつものように、リセットボタンは無いのだ。

何かが居る……

私が慎重に様子を伺っていると、奴が声を上げた。

「貴様を待つていたぞ！ 私が最初の守護神だ！」

最初とか紹介しちゃってるよ、コイツ……

わざわざ、私を待つていてくれたとはご丁寧な……

つて、どこの糞ゲーだよ……

私が呆れていると、さらに続けた。

「私の名は、ゴハンマ・ダカイ。いざ尋常に勝負だ！」

ボケ老人ですか……

しかし、この展開では戦うしか選択肢は無いだろう。

だが、武器はどうする？

何か無いか？

辺りを見渡しても、これといったものは無い……

これは困った……

ん？

ちよつと待てよ……

あいつ、いざ尋常に……って言ったたよな……

そうか！ そう言う事か！

「おい、守護神！」

私が呼ぶと、奴は何か驚いている。

「なんだ！ 何か用か！」

「私は武器を持っていない丸腰だ！ これで尋常に勝負が出来るのか？」

その問いに、奴は言葉に詰まっている。

「同じ条件で戦う事が出来ないのなら、貴様は卑怯者だ！」
ビツと人差し指を向けると、奴は一瞬ビクツとした。

「ならば、貴様に剣をやるう！ それなら同等だろ！」

これは、ありがたい。苦勞せずに、武器が手に入りそうだ。
「その剣で、私が勝てたら良いのだな？」

その言葉に奴は笑みを浮かべると、私の足元に一本の剣が投げられた。

私は、剣を拾う動作を始めながら考えを巡らせてみる。

やはり、中ボスのパターンのようだ……

自己紹介で、最初の守護神とか言ってるし……
そうなると当然、二人目が居るはずだ。

だが、さすがにヒント出し過ぎだろ……

これを仕掛けた奴は、卑劣な割には馬鹿なのか？

私が、スローモーションに一時停止を混ぜたような遅い動作をしていると奴が叫んだ。

「早く拾え！」

何やら、だんだん泣きそうになって来ている……

このまま泣かせてみるのも楽しそうだが、さすがに可哀想か……
いや、ちよつと待てよ……

何で、泣きそうになっているのだ？

今、私は何をしている？

ゲームにしてみれば、規格外な行動か？

規格外か……なるほどねえ……

面白そうだな……

第九節 塔の攻略ねえ……その3

もう、何階分を登ってきただろうか？

すでに数え切れないほど謎を解いてが、

この塔は本当に長い……

息を切らせながら階段を上がり、次のフロアに来ると奴は居た。

「よくぞ来たな、私の名はシュウ・トウ。察しの通り、二人目の守護神だ」

何だか先ほどと、ずいぶん雰囲気が違うな……

隣に置いてある、立派そうな鎧が気になって見ていると奴が言った。

「これが気になるか？ もし私に勝てたなら、この鎧をやるっ」

おや、ずいぶんと気前が良いな。

きつと、よほどの自信があるのだろう。

しかし、何だか真面目そうな奴だな……

さて、どうしたもんだか……

私は、奴に言った。

「それで、どうやって戦うんだ？」

奴は笑みを浮かべて、それに答える。

「お前は、見たところ戦士に向いているようだ。その剣で戦うが良
い」

やはり真面目だな……

これは、前の奴みたいなハツタリは通用しそうに無い。

そこに、後方へと思い切り弾き飛ばされる私が居た。

「そんな打ち込みでは、私には届かないぞ！ もっと腰を入れる！」

一体、コイツは何だ？

「踏み込みが甘い！」

また私は、剣を弾かれ後へと倒れこむ。
最初から、ずっとこうだ。

どう考えても、稽古を付けられているようにしか思えない。
何を考えているのだ？

だが、奴に勝たなければ先には進めないだろう。

仕方が無い……今は、これに付き合うしか手は無い。

私は気合を入れ直して、奴に打ち込んで行った。

くそ……ダメか……

「何だ？ もう終わりか？ 貴様の力はその程度か？」

私は、すでに息が上がって体力も尽き掛けている。

人を見下した視線に腹が立つが、どうにも勝てる気がしない。

どうすりゃいいのだ？

「まだ判らぬか？ 貴様には、それほどまでに疲れる故を考える頭
は無いのか？」

なんかム力つくが、奴の言う通りだ。

力任せに斬り掛かってても、あっさりと受け流されてしまう。

今までで判った事は、効率の悪さだ。

これを改善しなければ、絶対に勝てないだろう。

私は、さらに斬りかかる。

しっかりと……

素早く……

体の回転とバネ……

腰の入った踏み込み。

それ等を意識しながら、ひたすらに斬り込んで行った。

ん？ この感覚か？

剣の、風を切る音が変わった。

疲れて果てているはずの身体が、不思議なくらいに動き始めている。

何とか、奴と打ち合えている……いいぞ……

私にも信じられないほど、流れるような連打が奴に襲い掛かる。

その時、奴の剣が弾き上がった。
今だ……

私は一気に踏み込み、その胸に向かって真横へと剣を振り抜いた。

どのくらいの時間だろう？

一瞬の沈黙は、私にはとても長く感じられた。

「見事だ……」

奴は僅かな笑みを浮かべると、床へと崩れ落ちた。

まさか、勝ったのか？

とても信じられない……

奴を確認すると、すでに息耐えているようだ。

私は大きく溜め息をつくと、崩れるように座りこんだ。

そして、両手を天に向かって勢い良く掲げた。

「勝ったぞ〜！」

第十節 塔の攻略ねえ……その4

一息ついた私は、鎧を手にしてみる。

重さとしては革のライダーズジャケット程度しかないが、作りはシツカリしている。

遠目では白色の鎧かと思っていたが、どうも銀に近い。これが白銀と言う奴だろう。

条件は満たしたのだから、もう私の物だ。

怒られる事は無いはずだ。

試しに、鎧を装備してみた。

予想以上に軽い……

色々とポーズを取ってみるが、その動きを鎧に制限される事が無い。まるで、詠えたようだな……

どれ程の防御力があるのかは知らないが、身軽で居られる事はない。がたい。

何しろ、まだ先は長いのだ……

それからは少し仕掛けの難易度が上がったようだが、

これと言って時間制限も無いので、さほど焦りも感じていない。

良く考えれば、十分に解ける程度だ。

まるで、パズルゲームでもクリアする感覚で上へと進んで行った。

もしや、ここか？

周りの装飾などの作りは同じようだが、

何気にガランとした雰囲気妙に怪しい。

私は慎重に見渡してみるが、これといって何も無い。

そこには、上への階段があるだけだ。

と言う事は、あの階段が問題だ。
下手に進んで、発動されたらたまった物ではない……
とりあえず、ここで待つとするか……

やがて遥子が、息を切らせながら階段を登って来た。

「大丈夫だったか？」

私の問いに、手を上げて答えている。

「やはり、仕掛けの傾向に気付いたんだな？」

「あんたのゲームより全然楽よ、余裕だったわ！」

遥子は、疲れを振り払うように笑顔を見せながら親指を立てた。

「それは良かった」

あれだけのRPGゲームを、貸した甲斐があると言うものだ。

この際、勝手に持つて行った事には触れないでおこう……

さて、ここからが問題だ。

「多分、あの階段を上がると何かが起きると思う」

私が指差すと、それに頷いている。

「すぐに、行けそうか？」

私が聞くと、遥子は思い切り首を振っている。

まあ、予想通りだ。

「だよな……とりあえず、あの辺りで休もう」

見繕っておいた場所で、荷物を下した。

まず、このままで居れば何かに襲われる事は無いだろう。

そして、ここは意外に暖かい。

さらに床はカーペットを敷き詰めたようになっていたので

そのまま座り込んでかなり快適だ。

これなら、一階に居た時よりも遥かにゆっくり休める。

私の予測では、次がラスボスだ。

今のうちに、十分な体力を回復しておくのが最善だろう。

第十一節 塔の攻略ねえ……その5

ふと目が覚めた……

どのくらい寝てしまっただろう？

私が目を覚まそうと身体を動かしていると、遥子も起きたようだ。

「大丈夫か？」

私の声に、笑顔を見せた。

さて、まずは作戦会議だ。

私は、遥子に尋ねてみる。

「ところで、そっちはどんな試練だったんだ？」

それに、遥子は笑顔を見せる。

「実はね〜、魔法を覚えちゃったのよ」

「すげ！マジで？」

「かなり強いらしいわよ〜」

そう答えると、遥子は不敵な笑みを見せた。

ならば、定番のフォーメーションで十分にいけるだろう。

「そしたら私が前衛で攻撃している間、後方から援護してくれるか？」

それに頷いた遥子に、話を続けた。

「もし何か問題が起きたら、その時の判断は任せる。私もなるべく合わせるから、臨機応変に頼むぞ」

遥子は、大きく頷いた。

「さあ、行くか……」

二人で階段を上がるうとすると、それが幻のように消えてしまった。

「来るぞ……」

私達は、辺りを警戒する。

その時、フロアの中心が光り出した。

これまた、お約束だな……

辺りが光に包まれ、その眩さが消えていくと

そこに、奴が現れた。

「私の名は、ヨメイ・ビリー」

こいつ、きつと最悪だろ……

「よくぞ、ここまで辿り着いた。だが、これで終わりだ。覚悟するが良い」

落ち着いた低音ボイスが何だか偉そうだが、その言動が良く似合う巨体だ。

確かに、強そうだ……

さて、どうしたもんだか……

まずは、牽制だ。

「ちなみに覚悟は出来ないが、どうする？」

私が問うと、不敵に微笑んだ。

「無駄だ。私に、それは通用しない」

だよな……

だが、いきなり打ち合いたくは無いのも心情……

まずは、奴の動きを見極めたい。

「ちよつと一発、魔法を撃てるか？」

私が問うと、それに遥子は頷いた。

「行くよ！」

遥子の掛け声に、私は剣を鞘から引き抜く。

その魔法が放たれた瞬間に、私は走った……

「ダメ！ ちよつと待って！」

遥子の叫ぶ声で、その場に停止した。

その意味は、瞬時に理解できた。

魔法が、全く効いていない……

こいつ化け物か？

「これは、参ったな……」

私が呟くと、遥子が言った。

「試してみる、動きがあつたら行つて……」

そのまま詠唱を始めると、ボールを持つように差し出した両手の中に光が溢れ出す。

凄いな……まるで魔法じゃん……

いや……魔法か……

ふと遥子が腰を落とすと、その光が溢れる両手を腰に溜めた。

え？ まさか、そのポーズって……

それを、まるで中国拳法のように前に突き出した。

「破〜！」

いやいや……確かに有名だけどさ……

まるで、爆発でも起きたかのように轟音が響く。

やったか？

その時、低い声が響いた。

「その程度では、私を倒す事は出来ない」

マジっすか……

奴が、こちらに歩みを進めて来た。

ヤバイな……考えている暇は無さそうだ。

もはや、行くしかない……

私は、全力でダッシュした。

甲高い音を立てて、互いの剣が弾け合う。

こりゃ強いわ……

私の攻撃を、余裕の笑みで弾きやがる。

だが、まだ打ち負けている訳ではない。

私は、連続攻撃を続けた。

「どいてー！」

後から聞こえた声に、思わず身を屈める。
私の頭上を、白い光が通過する。
その後には続き、さらに連続攻撃を仕掛けていく。

しかし、奴は強い。

いかん……徐々に押され始めている……
くそ……

奴の剣を思い切り弾くと、大きく間合いを取った。

「こりゃ強いな……」

息を荒げながら言つと、遥子が囁いた。

「ねえ？ アイツの目の前で何分くらい耐えられる？」

「ずっと、打ち合ってたか？」

おもわず問い返すと、遥子は頷く。

「そうだな……もって2分か……」

私が答えると、遥子はそれに続けた。

「それじゃ、とにかく耐えて！ あたしが声をかけたら避けてよ！」
それに大きく頷くと、また奴へと斬りかかって行った。

身の毛がよだつほどの剣速が、寸前の所をかすめて行く。

こんな剣に当たったら、ひとたまりも無い。

私はステップを効かせながら奴の死角へと回避するが、
一撃さえまともに与える隙を見出せない。

どこまで強いのだ、こいつは……

もはや、私も何時までもつか判らない……
だが、あと少し……せめて、もう少し……

「どいてー！」

突然に聞こえてきた声に、私の身体が反応する。

私が避けたすぐ後には、すでにそれが迫っていた。
恐ろしいほどの衝撃波が、奴に襲いかかる。

それに続くように、私は全力で踏み込んだ。

これで、どうだ……

私が放った突きは、奴の喉元を貫通している。

その剣を、思い切り横へと振り抜くと辺りに血飛沫が舞い上がった。そして、その巨体は静かに床へと崩れ落ちた。

終わった……

私は、おもわずその場に膝を落とした。

振り向けば、遥子もやはり座り込んでいる。

「はい！ 合格〜！」

ありえないほど間抜けな声が、辺りに響き渡った。

何処からともなく、ひらひらと花吹雪が降ってきている……

「おめでとうございませ〜す！ 見事に試練をクリアでございませ〜す！ カランカラン」

たった今倒したはずの奴が、目の前で笑顔を浮かべ拍手をしている。

「はい？」

何が起きたか良く判らないで居ると、

どこから出てきたのか倒したはずの守護神達が笑顔で寄って来て、私達は首に派手な花のレイを掛けられてしまった。

「何？ これ？ いったい何？」

そんな、遥子の問いは確かに道理である。

あの……状況が……全く見えないんですが……

「さあ、君達もこっちへおいでよ」

ニコやかに呼ばれた先には、いつの間にもやら大きなテーブルが置い

てあり、
そこに溢れんばかりの料理やら飲み物が置いてあった。

すでに、どんちゃん騒ぎ状態になっている。

「いや〜、嬉しいね〜」

「全くだ！ 久々だからね〜」

奴等は、笑顔で語り合っている。

何なの？ この騒ぎは……

その光景を見て、遙子も啞然としている。

「おめでとう！ カンパ〜イ！」

グラスを持たされて、乾杯をさせられてしまう……

「ちよつとさ……何が、どうなってるんだよ……」

私の言葉に、奴等は揃って驚いた顔をしている。

その時、ゴハンマ・ダカイが言った。

「あれ？ 聞いてないの？ 君達はたった今、見事に勇者の資格を得たんだよ？」

「はあ？」

私達は、二人で目を合わせた。

話によると、ここは勇者の資質を試す為の塔だそうだ。

数々の謎を解ける思考を持ち、

尚且つ状況次第では突飛な発想で危機を切り抜けられる者が、武器と魔法を得る事が出来る。

そして命が危険に晒された時、互いを信じて戦えるかを判断する為の試練なのだそうだ。

聞けば確かに、その通りの事をしてきた訳だが、あまりに事前情報が無さ過ぎる。

奴等はそんな事は知っていて当然だと言う顔をしているので、

「そんな話は、世間一般には知られていないぞ？」と言ってみたら
ゴハンマ・ダカイが

「え〜！もしかして僕達って忘れ去られているの？」と泣き出してしまった。

だが、気になる事はまだある。

「ところで、あんたら誰？」

私が聞くと、皆が愕然としている。

「まさか、本当に私達を知らないと？」

それに二人揃って頷くと、全員が固まってしまった。

「まさか、そこまで民に忘れ去られているとは……」

ヨメイ・ビリーが、大きく溜め息をつくと話し始めた。

「我々は、神の意思によってこの塔に留まり試練を与えている」
いきなり神っすか……

「民には、我等を記した書が広く渡っていたはずなのだが……」
私は、それに続けた。

「この塔の事は、信神ルイとか言う勇者の書にしか出てなかったが？」

「なんと、あのルイか！ そうか……だが、それも今は懐かしい話だ」

ほう……あの話は、事実だったんだ……

それで話を纏めると、こいつ等は神の使いつて事だよな？

「あんた等に聞きたい事がある」

私が声を上げると、ヨメイ・ビリーは静かに頷いた。

「私達は、何故この世界に居るのだ？ いったい誰の策略だ？」

その質問に、腕を組んで眉をしかめる。そして、しばらく考えてから話し始めた。

「我等はすでに、この塔で現世とは数百年の時を隔てている。

これは予見でしかないが、そこに神の意思が働いているのは確か。

神によって、この世界に遣わされたと考えて良からう」

遣わされたと言われてもなあ……こちらにしてみれば、大迷惑でしか無いのだが……

「それで、私達は元の世界に帰れるのか？」

私の問いに、少し間を空けてから答えた。

「それは、我等には判りかねる。申し訳ない……」
謝られちゃったよ……参ったな……ここまで来て、答えは見つからないままか？

「だが、1つだけ……」

ヨメイ・ビリーは人差し指を立てた。

「おぬし達には、神の加護が見える。魔王討伐に成功した時、必ず答えは見つかるだろう」

また、曖昧な……

だが彼等には、それが限界でもあるのだろう。

やはり、行くしか道は無いのか……

いつしか私達はすっかり打ち解けて、謎の宴は丸一日続いた。

やがて祭りの後のような静けさの中で、私達が塔を出る時は訪れた。その時に、ビリーが話し始めた。

「我等は、おぬし達を応援している。だが塔を出れば、もはや二度と会う事も無かるぞ。」

これは餞別代わりだ、受け取ってくれないか？」

そこには兜や籠手にローブなど、立派な装備が一通り置いてあった。

「こんなに、貰ってしまつて良いの？」

ビリーは、ふと笑顔を浮かべた。

「皆が、おぬし等を気に入ってしまったのだよ。我等には、この程度しか出来る事は無い。」

是非、受け取ってくれ」

遙子と目を見合わせてから、二人で頷いた。

そして、めでたく？

コジユウ塔を攻略した私達は、魔の大陸を目指して歩き始めた。

第十二節 冒険者の視線 蓮の場合

私は、ヨウジヨ国から魔の大陸を目指している。

名前は、チルド・レン知瑠土蓮

攻撃は剣が主だけど、多少の治癒魔法くらいならできるわ。

良く白魔法使いとか言われるけど、本当を言えば魔法はそれほど得意ではないの。

ようやく、オジ三国に到着したわ。

半年の時をかけて、やっとこの街まで辿り着いたの。

オバ帝国の横断は、本当に大変だった……

少し進むたびに変なのに絡まれるし、ジドウソ・ウダンって妙な集団に捕まりそうなるし。

ヨウシエンケミ要刺怨組って、危ない組織にも付き纏われたわ。

一時は、ホゴダン・タイって人にしつこく追い回されて大変だったの。

オバ傘下の国々も酷かった。

カリア殿下の許可は下りているのに、

ミドリノ・オバ傘下管理局の人達が全然通してくれないの。

「危ないから、横断しちゃダメよ」って理由になって無いわ。

本当に、頭にきちゃった。

ワタリマ・シヨウ綿理間将って言う旅の商人の方と出会わなかったら、

絶対にここまで来られなかったわ。

必要ない物も色々と買わされたけど、それは仕方ないわ。

私の隣に居るのは、黒魔法使いのセイドウイツ・シヨウコ西堂伍翔子

妙に大げさな名前は、王宮に仕える貴族だからなの。

私の家系は冒険者だから身分は随分と違ったけど、翔子とはとても

仲が良かったわ。

私が冒険者になる事を決めた時も、何も言わずに付いてきてくれた。

当初からの仲間であつて、幼馴染でもあるの。

仲間は今も一人、音オト子コ和ワ面メン伊イ代ダイつツてテ女メの子コが居イるルのノだけだけどど、

久々に旧友に会いに行くと言つので町に付いてからは別行動をしているわ。

三人でここまで来たのだけれど、今は翔子と二人。

この町の様子を伺いながら、必要な買い物も済ませる予定なの。

その時、翔子が私に声をかけた。

「ちよつと道具を買ってくるよ。何件か回るから、ここで待ち合わせしよう」

そう言つと翔子は遠くの人込みに紛れて行つた。

あれから、どのくらい時間が経つたかしら？

待ち合わせ場所に戻つて来てみたけれど、翔子は居ないみたい。それからも待つてみたけど、なかなか帰つてこない。

まだかな？

暇つぶしに何処かに行つてみようかと思つて居ると、翔子が見えた。私が手を振つて呼ぶと、翔子は近づいて来ながら話しかけてきた。

「さつそくで悪いけど、行きたいところがある。さあ行こう」

私は、首を傾げながら聞いてみる。

「え？ 何処に行くの？」

「この先に行かなければいけない所があるんだ。すぐだよ」

そう言つとすぐに歩いて行つてしまったので仕方なく付いて来たが、もう森の入り口だ。

こんな所に？

翔子は森へと入っていく。

「ねえ、ちよつと。本当にこの先に行く訳？」

「ああ、そうだ……」

何か、おかしい気がする。

「ねえ、やめようよ。この森、なんか嫌な雰囲気だよ」

すると翔子は、いきなり私の腕を掴んで引つ張り始めた。

「いいから来るんだ！」

え？　なんで？　こんな翔子は今まで見た事が無い。絶対に変よ……

「ちよつと……貴方、誰？」

私が抵抗すると、翔子の声色が急に変わった。

「くそ……黙って付いてくれば良いものを……」

え？

さらに驚いた。

翔子の足物で、何かが動き始めている。

何？　いったい何？

振り返った翔子の顔は、もはや元の形を止めていなかった。

それに思わず、悲鳴を上げてしまう。

まるで跳ね上げられるような強い衝撃に襲われると、何かが撒き付

いて来る。

「何これ！　気持ち悪い！」

「気持ち悪いだと？　ふざけるな！」

突然怒ったと思うと、数え切れない程の触手に体中を縛り上げられた。

「貴様等、いつも馬鹿にしゃがって！　殺してやる！」

「うう……… 苦しい………」

その力は激しく、もう声も出ない。意識も遠ざかり始めた。

このままじゃ……… 殺される………

もうダメかと思ったその時、突然に化け物が奇声を上げた。

何とか目を開けると、化け物が燃え上がっている。

何が……… 起きたの？

しかし、私には何が起きているか考える余裕も無い。

そのまま意識が消えていった……

痛い…… 誰かが頬を叩いている……

何？

声が聞こえる……

「大丈夫か！」

私は僅かに目を開けると、安心したような表情で呟いた。

「良かった、どうなるかと思った……」

あ、翔子だ……

そうか、助けてくれたんだ……

ぼんやり考えていると、霧に掛かっていたような意識がようやくはつきりしてきた。

「あ、ありがとう」

「怪我は無いか？」

手足を動かしてみると、痛みは無い。

「うん、大丈夫みたい」

私は、ゆっくりと立ち上がった。

その時、翔子が目をそらした。

どうしたんだろう？

「何？ どうしたの？」

翔子は目をそらしたまま、私に指を向ける。

そこに視線を向けてみると……

「キヤーーー！！」

そこには、私の小さな胸が見事に肌蹴っていた。

荷物の中から上着を出して着替えていると、翔子が話し始めた。

「あの化け物は、いったい何なんだ？」

「良く解らないけど、翔子だったの」

「え？」

理解できないようで、不思議そうな顔をしている。確かに、説明が難しい。

私は出来る限り、解りやすいように説明した。

「化けていたのか……私に……」

それに頷くと、翔子は眉を顰めた。

「それって、この街に魔物が紛れているという事だよな？」

確かにそうだ。そう聞くと、あれ以外にも居て当たり前前に思えてくる。

「なら伊代は？ 大丈夫なのか？」

「嘘……そんな……」

私達は、伊代の向かった先へと急いだ。

第十三節 彼女からの視線 遙子の場合

何かに慌てた少女が、青い顔をして駆け寄ってくる。

「助けてください！ お願いします！」

あら？ こんな子供が、一体どうしたのかしら？

「何があつたの？ 助けが必要なの？」

その子が心配になって近づいて行くと、後から肩を掴まれた。

「ん？ 何？」

何気に振り向くと、驚くほどに勇太は怖い顔をしていた。

「いいから、下がっている」

そう言うと勇太は前に立ち、普段は絶対に出さない低い声で言った。

「貴様の命を奪うつもりは無い。今のうちに大人しく消えろ」

え？ 子供相手に、何を言っているの？

それも、こいつが思いつき好みそうな美少女なのに……

言われた少女も、オドオドしている。

勇太は、大きく声を荒げて怒鳴りつけた。

「さっさと消えねえと、叩き切るぞ！」

うわっ！ これ、引くわ……

ちよっと不味いんじゃないの？

それじゃ、泣いちゃうわよ？

ほら、震えているし……

だが、その予想は大いに外れて少女は笑い始めた。

え？ 何それ？

その笑い声が、まるで変声装置でも使ったように徐々に低音へと変わっていく。

うそっ……

「バレちまつちゃ、しょうがねえ！ 無様に死ぬがイイ！」

突然に身体が黒く巨大化すると、まるで大トカゲのような姿に変化した。

それと同時に、一筋の閃光が走った。

「くそ……何故、解った……」

勇太はそれに答える事も無く、剣を収めながら背中を向けて歩き出す。

「行くぞ」

あたし達の後で大トカゲが綺麗に二つに分かれると、その場に崩れ落ちた。

「ねえ？ 何で人間じゃないって解ったの？」

勇太は、僅かに笑みを浮かべる。

「私の、少女を見る目を甘く見るな」

その答えに、何か複雑な気持ちを感じたのは確かだった……

「でも、どういう事なの？ まさか、この街に魔物が紛れ込んでいる訳？」

それに、勇太は少し眉間にシワを寄せて言った。

「ああ……残念だが、そのようだ。
バレると厄介な事になりそうなので黙っていたが、すでに10人くらいは見かけたよ。

あの姿で魔の大陸を目指しそうな冒険者達を巧みに誘っては、とつと抹殺してしまおうって寸法だろう。臭いは元から断てつてな」

あたしは、呆れながら呟いた。

「ずいぶんと、卑怯ね……」

そんな言葉に、勇太は首を振った。

「いや、そうとも言い切れないぞ？ 敵を滅ぼすに卑怯もへったくれも無いのは真実。

これは立派に兵法だ。

だが、こう言った戦略に長けている所を見ると相当の強敵と見て間違いない。

覚悟だけはしておいた方が良さそうだな」

第十四節 冒険者からの視線2 伊代の場合

嫁いで行った、幼馴染の親友。

ユウ・レイカ
由宇麗佳と涙の別れをしたのは、もう5年も前の話だ。

今頃はあの子も、良い奥さんになっているはず。

麗佳との久しぶりの再会に、私の心は躍っていた。

待ち合わせの公園で待っていると、麗佳がやってきた。

「久しぶりね、元気？」

相変わらず綺麗な顔立ちに抜群のスタイル、彼女が当時モテタのも素直に頷ける。

私達は軽い挨拶を済ませると、

「じゃ、行こうか」

麗佳が歩き始めた。

「あつ、待って。今日は仲間と来ているの。あまり時間が無いから、貴方のお家にお邪魔は出来ないわ」

「あら、そうなの……」

とても残念そうな顔を浮かべている。

「じゃ、その代わりに良い場所に案内するわ。景色が良いのよ、そこへ行きましょう」

私は大きく頷くと、麗佳に付いていった。

何か変……

さつきからどんどん森の奥へと歩いて行っている。

森と言っても、坂を上がっている感じも無い。少なくとも山では無さそうだ。

こんな所に……景色が良い場所なんて……

「ねえ、本当にこっちななの？」

何気に聞いてみたが、返事が無い。

どうしたのだろう？

もう一度声を掛けようとした時、麗佳が突然に振り向くと私に駆け寄って来た。

「え？」

何か変な衝撃があった気が……

何これ？ お腹に何か刺さっている……

すでに私の足は激しく震え始めている、もう立っている事も出来ない。

おもわず、その場に座り込んだ。

「どうして？ こんな……嘘でしょ？」

その時、何かが私の上を凄い勢いで通り過ぎた。

今のは何？

その物体を確認できないままいると、しばらくして目の前で変化があった。

驚く事に、麗佳の首が静かに後へと転がり落ちてしまったのだ。

え？ 彼女が、死んだ？ そんな……

しかし、もう私は声を出す事も出来ない……

その光景を呆然と眺めていると、

頭が無くなつた首から植物のような何かが勢い良く生えてきた。

嘘？ 何？ 何が起きているの？

それはあつという間に麗佳の体を包み込むと、そこにはまるで違う物が現れた。

大きな植物が奇声を上げて不気味に動いている。

その時、植物に真っ直ぐ光が走つたかと思うと、

それは綺麗に二つに分かれて左右に倒れて行った。

ああ、もうダメ……もう何が起きているのか良く判らない。

「大丈夫？ 貴方しつかりしなさい！ 意識をしつかり持って！」

その声で一瞬我に返つたが、また徐々に目の前が霞んでいく。

「大丈夫、傷は浅いわ！」

「よし！ 刺さったナイフはそのままだ！ すぐに運ぶぞ！」

身体が突然動いたようだが、もう良く判らない。
そのまま意識は遠くへ消えていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9795y/>

ヨウジョ・ジャパン

2011年12月11日17時52分発行